

## 2019 年度支部活動【九州・沖縄支部】開催報告

### 「日本語教育における質的研究を問い直す」

主催：公益社団法人日本語教育学会

開催日：2019 年 7 月 20 日(土)・21 日(日)

会場：沖縄科学技術大学院大学(OIST)シーサイドハウス

参加者：89 名(会員：60 名・一般：29 名／海外 2 名・沖縄県外 65 名・沖縄県内 22 名)

台風の接近が危ぶまれる中、沖縄科学技術大学院大学にて質的研究をテーマに支部活動を行いました。今回の支部活動は、公募による研究発表を行わず質的研究にテーマを絞って 2 日間行う、参加人数に制限を設ける、参加費が 6,000 円といったような、これまでの支部活動・支部集会にはない試みでした。

2 日間にわたって講師を務めてくださったのは、名古屋大学大学院の大谷尚先生です。1 日目の講演では、「質的研究とは何か」について量的研究との比較を踏まえ、質的研究初心者にもわかりやすくご説明くださいました。講演に先立ち寄せられた質問に一つ一つ丁寧に回答されただけでなく、講演後に出された質問に対しても、回答が後日 PDF で配布されました。



講演の後は、6 名のパネリストと 11 名のディスカッサントによって「日本語教育における質的研究の現状と課題」をテーマに討論パネルが行われました。質的研究における客観性や普遍性と当事者性、実践研究と実践報告の違い、質的研究の評価や査読など、多岐にわたるトピックで会場も巻き込んだ議論がなされましたが、当然のことながら時間の制限から結論を得るには至らず、懇親会、その後の SNS 上でのディスカッションにまで持ち越されました。多くの参加者から今後の継続が望まれています。

2 日目の最初は、群馬大学飯田敦史先生による講演「ヴォイスとアイデンティティから見る第二言語習得研究」が行われ、日本人英語学習者による俳句を用いた最新の研究をご紹介くださり、日本語教育にとどまらない広い視野から、質的研究の実践についてのお話をきくことができました。

飯田先生のご講演後は、オープンスペースに移動して質的研究に関するポスターセッションが行われました。5 名の発表者が質的研究における課題や実践例について発表し、意見交換を行いました。会場が少し狭かったこともあり、大変なにぎわいで、活発な情報交換が行われていました。



そして再び大谷先生にバトンが渡り、昼食時間を挟みながら夕方までワークショップが行われました。ワークショップでは、事前に募集されたテーマによって参加者がグループに分かれ、そのテーマについて研究デザインを作成する作業が行われました。会場での WIFI 環境が整っていたことから、作成過程では、各参加者がパソコンやタブレットを使用し、各グループ 1 つずつグーグルドキュメントのファイルを共有して協働作成するという方法がとられました。



なお、本プログラム開始前の 1 日目午前中には、一般公開のプレセッションとして[調査研究推進委員会の「ワールドカフェ」](#)と[チャレンジ支援委員会の「発表応募支援セミナー」](#)が行われ、本プログラムの参加者とともに、一般参加者にもご参加いただきました。また、賛助会員ブースにおいて、株式会社凡人社の書籍展示、国際言語文化センター附属日本語学校の団体・活動紹介もあり、盛りだくさんの支部活動となりました。



今回の支部活動は 2 日間質的研究について、広く、そして深く学ぶ機会となりました。参加者の皆さんからのアンケートでは肯定的な意見が多く寄せられ、テーマを絞り、人数を限定して行うという今回のような支部活動のやり方も一つの形態として成立することが分かり、今後の支部活動の可能性が広がったように思われます。

今回のこのような支部活動が実現できたのは、講師を引き受けてくださった大谷先生、飯田先生はじめ、快くご協力くださったパネリストやディスカッサントの先生、ポスターセッションでご発表いただいた先生、さらに会場についてご協力いただいた OIST の先生方のご尽力があったことでした。この場を借りて心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(報告者 支部活動委員 山元淑乃)